

日本画に見る四季

●出品リスト

No.	季節	作家名	作品名	技法・材質	制作年
1	春	松岡映丘	道成寺	絹本着色（六曲一双屏風）	1917（大正 6）
2		小野竹喬	春暖	絹本着色（軸装）	1920（大正 9）
3		森崎伯霊	浦の春	紙本着色（額装）	1971（昭和 46）
4		丸投三代吉	菜の花	紙本着色（額装）	1989（平成元）
5		福本達雄	追想	紙本着色（額装）	2012（平成 24）
6		大野麥風	ヤマメ（『大日本魚類畫集』第三輯より）	木版・紙（額装）	1937-42 （昭和 12-17）
7		川西英	城の春	木版・紙（額装）	1947（昭和 22）
8	夏	竹内栖鳳	南京初夏	絹本着色（額装）	1921（大正 10）
9		濱田観	蓮池	紙本着色（額装）	1949（昭和 24）
10		森崎伯霊	夏の朝	紙本着色（額装）	1970（昭和 45）
11		大野麥風	トビウオ（『大日本魚類畫集』第一輯より）	木版・紙（額装）	1937-42 （昭和 12-17）
12	秋	島琴江	秋景山水図	紙本淡彩（軸装）	1891（明治 24）
13		橋本関雪	秋山吟客図	絹本淡彩（軸装）	1917（大正 6）
14		村上華岳	秋峯清明図	紙本墨画（軸装）	1930（昭和 5）
15		山口華楊	深秋	絹本着色（軸装）	1940（昭和 15）頃
16		濱田昇児	幹	紙本着色（額装）	1997（平成 9）
17		川西祐三郎	書写山	木版・紙（額装）	1980（昭和 55）
18	冬	酒井抱一	雪中鷺（『柳花帖』より）	紙本墨画淡彩（画帖）	1819（文政元）
19		松岡映丘	残月	絹本着色（軸装）	1918（大正 7）
20		丸投三代吉	新雪	紙本着色（軸装）	1950-80年代
21		川西英	湖畔雪景	木版・紙（額装）	1942（昭和 17）
22		上野長雄	水仙と徳利	木版・紙（額装）	1968（昭和 43）

春夏秋冬、四季の気候がはっきりした日本では、古来より絵画で季節を表現することが好まれてきました。当館所蔵品の中にも、季節を象徴するモチーフを描いた作品がたくさん見られます。

草木が芽吹き桜舞う春——松岡映丘《道成寺》や小野竹喬《春暖》、福本達雄《追想》などでは、満開の桜が作品に彩りを添えるのみならず、春特有の暖かくけだるい、あるいは幻想的な空気感を演出します。生きものたちの生命力あふれる夏——濱田観《蓮池》や森崎伯霊《夏の朝》は画面全体に広がる緑が目清々しく、大野麥風《トビウオ》では真っ青な海原を背景に夏の魚・トビウオが元気に飛び交います。紅葉と実りの秋——島琴江《秋景山水図》や橋本関雪《秋山吟客図》、村上華岳《秋峯清明図》では、実際は色鮮やかであるはずの秋の山肌があえて色調を抑えた水墨基調の山水画で表現されており、その幽玄な世界はかえって見る者の想像力を喚起します。そして雪が積もり深閑とした冬——丸投三代吉《新雪》、川西英《湖畔雪景》は雪化粧をした里山の風景を、上野長雄《水仙と徳利》は冬の花・水仙と寒い時期にはたまらない熱燗入りの徳利を描き出します。

本展では、描かれた景色・風物・動植物などを通して四季折々の情趣が感じられる作品を、日本画を中心に一部木版画も交えてご紹介します。

●作家解説

酒井抱一 SAKAI Hoitsu 1761 (宝暦 11) ~1829 (文政 11)

姫路藩酒井家 2代忠以の実弟として江戸神田に生まれる。本名忠因。37歳のとき武家の生活を嫌って出家し、以後、書画、俳諧に風流三昧の生涯を送った。別号に屠龍^{とりりゆう}。絵は初め狩野派に学び、次いで沈南蘋の写生画、さらには歌川豊春風の浮世絵、土佐派、円山派など当時の諸派を遍歴したが、やがて俵屋宗達、尾形光琳ら琳派の作品に出会い、これに私淑して自らを琳派の系譜の末につなげる事を自覚した。その画風は、宗達、光琳から受け継いだ日本的な装飾性の中に、文化文政期の江戸の粹人らしい繊細な感覚と鋭敏な情感を織りまぜ、詩情豊かな画面をつくりあげている。

島琴江 SHIMA Kinko 1821 (文政 4) ~1899 (明治 32)

島琴江は江戸末期から明治期にかけて姫路で活動した絵師。同じく絵師の島琴陵^{きんりょう} [1782 (天明 2) ~1862 (文久 2)] の実子であるが、詳しい経歴は記録がなく不明。父・琴陵は出生地不詳、名は鵬。元々南部藩士で、江戸で人を殺めたため長崎に逃れ、そこで舶来清人らとの交友から長崎派の写生的な花鳥画を学んだと言われる。天保初年に酒井家筆頭家老高須隼人の招きで来姫したというのが、定かではない。親子の号に共通する「琴」の字は、姫路城の西にある葉師山の別名「琴丘」に由来。姫路の船場本徳寺廟所に二人の墓がある。

竹内栖鳳 TAKEUCHI Seiho 1864 (元治元) ~1942 (昭和 17)

京都市に生まれる。本名恒吉。17歳より円山四条派の幸野樞嶺に学ぶ。明治 22 年京都府画学校出仕、同 32 年には京都市美術工芸学校教諭となる。京都画壇の新進作家として注目され、明治 33-34 年欧州遊学、同 40 年文展開設とともに審査員となる。京都伝統の円山四条派を基礎に、ターナーやコロラ西欧の油彩描写法も摂取して日本画の近代化を進め、軽妙斬新な独自の写生画風を開いた。画塾「竹杖会」を主宰し多くの門下生を輩出、京都画壇の指導者としても功績を残した。終始官展にとどまり、在野（日本美術院）の横山大観と画壇の双璧をなしたことから、「東の大観、西の栖鳳」と並び称される。昭和 12 年文化勲章受章。

松岡映丘 MATSUOKA Eikyu 1881 (明治 14) ~1938 (昭和 13)

神東郡田原村（現・神崎郡福崎町）に生まれる。本名輝夫。最初狩野派の橋本雅邦に学んだが、大和絵の研究を志して住吉派の山名貫義^{つらよし}の門に入った。明治 32 年東京美術学校日本画科に入学、同 37 年首席で卒業した。明治 41 年から昭和 10 年に至るまで同校で教鞭をとり、現代日本画壇を代表する作家を次々と世に送り出した。この間文展、帝展に出品し度々特選を受賞、審査員も務めた。伝統的な大和絵に近代的な性格を付与し、新しい大和絵を創造した功績は大きい。

橋本関雪 HASHIMOTO Kansetsu 1883 (明治 16) ~1945 (昭和 20)

神戸市郊外の坂本村（現・神戸市中央区）に生まれる。本名関一。父海関は明石藩の儒者であった。12歳の時、四条派の片岡公曠に学び、その後京都に出て竹内栖鳳に入門。文展では大正 5 年から 3 年連続特選、以降、帝展の中心画家として活躍。昭和 9 年帝室技芸員、翌年帝国美術院会員となる。多数の著作があるほか、古美術研究家としても知られている。諸派の画風に学びながら深い教養に根ざした格調高い作品を残した。とりわけ水墨の動物画に卓越した筆技を見せている。

むらかみ かがく
村上華岳 MURAKAMI Kagaku 1888 (明治 21) ~1939 (昭和 14)

大阪市に生まれ、幼時より神戸に住む。本名震一。明治 36 年京都市立美術工芸学校入学。同校卒業後、京都市立絵画専門学校に学び、竹内栖鳳の指導を受ける。明治 41 年文展に初出品、大正 5 年同展特選。大正 7 年、土田麦僊、榊原紫峰、小野竹喬、野長瀬晩花らと近代日本画の革新を目指し国画創作協会結成に参加、女性の官能美と菩薩の聖性を融合させた代表作「裸婦図」など意欲的大作を発表するも、同協会解散後は神戸の自宅に閉じこもり、神秘的な山水画や仏画の小品を数多く描いた。

おのおのばくふう
大野麥風 ONO Bakufu 1888 (明治 21) ~1976 (昭和 51)

東京に生まれる。本名要蔵。はじめは太平洋画会、白馬会等で洋画を学ぶも、後に日本画に転向。明治 42 年、大正 3 年、同 8 年に文展や帝展に出品するほか、個展を度々開催して自作の展示を行なう。大正 12 年関東大震災を契機に関西に移住、昭和 5 年兵庫県美術家連盟の創設に参加。一方で、魚など水生生物の生態を緻密に描写した木版画集「大日本魚類畫集」の原画制作も手掛ける。戦後は兵庫県日本画家連盟の委員長を務め、最晩年には兵庫県美術祭にも連続して出品した。

おのちつきょう
小野竹喬 ONO Chikkyo 1889 (明治 22) ~1979 (昭和 54)

岡山県に生まれる。本名英吉。京都へ出て竹内栖鳳に師事。明治 40 年第 1 回文展に初入選。明治 44 年京都市立絵画専門学校卒業。大正 5 年第 10 回文展で特選となるも、翌々年の文展審査を不満として土田麦僊、村上華岳らと国画創作協会を創立。昭和 3 年同会解散後は官展に戻り、戦後は日展を中心に活動。昭和 22 年には京都市立美術専門学校教授に就任し、京都市立美術大学へ改組した後も教鞭を執った。昭和 43 年文化功勞者となり、同 51 年文化勲章受賞。確かな構成力のもと温和で詩情溢れる風景画を制作した。

かわにしひで
川西英 Kawanishi Hide 1894 (明治 27) ~1965 (昭和 40)

神戸市に生まれる。本名英雄。大正 4 年、県立神戸商業学校の卒業直前に初個展を開催。大正 12 年第 5 回日本創作版画協会に初入選し、同 14 年画名を英と改める。昭和 3 年第 7 回国画創作協会に初入選し、翌年版画家の菅藤霞仙すがとうかせん、北村今三らと三紅会を結成。その後日本版画協会会員、国画会会員となり活躍する。昭和 7 年ロサンゼルスオリンピック芸術展入選をはじめ、シカゴ日本版画展、サンパウロ国際美術展など、世界各地の美術展にも日本の代表的な木版画家として出品を重ねる。木版のもつやわらかさを生かした独自の作風を築いた。

はまだかん
濱田観 HAMADA Kan 1898 (明治 31) ~1985 (昭和 60)

姫路市手柄に生まれる。本名仙太郎。大阪に出て商業デザインの仕事をするかたわら信濃橋洋画研究所に学ぶ。昭和 4 年京都に移り竹内栖鳳に師事。昭和 8 年の第 14 回帝展で初入選、同 11 年京都市立絵画専門学校を卒業。戦後も日展を中心に活躍し、昭和 39 年同展日本芸術院賞をはじめ受賞多数。花鳥画を得意とし、東洋的な幽玄味のある絵画世界を創出した。昭和 59 年より日本芸術院会員。姫路市美術展の審査委員長も務めた。

やまぐち かよう
山口華楊 YAMAGUCHI Kayo 1899 (明治 32) ~1984 (昭和 59)

京都市に生まれる。本名米次郎。生家は友禅の染色を生業とする。幼年より西村五雲に師事。京都市立絵画専門学校に学び、大正 8 年、卒業と同時に竹内栖鳳の「竹杖会」に参加。昭和 11 年から 24 年にかけて母校で教鞭を執る一方、同 13 年画塾「しんちよう 農鳥社」を主宰する。京都画壇の伝統である写生の精神をふまえ、近代的な芸術感覚で花鳥画、とくに動物画に秀でる。日展で審査員、顧問など要職をつとめた。昭和 56 年文化勲章受章。

もりさきはくれい
森崎伯霊 MORISAKI Hakurei 1899 (明治 32) ~1992 (平成 4)

飾磨郡下中島村 (現・姫路市飾磨区中島) に生まれる。本名寅義。義務教育終了後、家業を手伝いながら次第に絵画に興味を示す。21 歳の時、本格的に絵画の勉強に専念すべく京都に出たが良き師に巡り合えず、2~3 年の間姫路との往來を繰り返し独学する。その後は郷土に根を下ろし農業のかたわら絵筆をとり、日本美術院展を中心に作品を発表し続け、独自の画風を育んだ。郷土を題材にした牧歌的な作品が多く、大自然で働く農民の素朴な姿には自然との暖かい交流が感じられる。

うえのながお
上野長雄 UENO Nagao 1904 (明治 37) ~1974 (昭和 49)

神崎郡香寺町 (現・姫路市香寺町) に生まれ、少年期に一家で神戸に移り住む。大工の見習いなどをした後、神戸市役所に勤務。一方で中安保なかやすに師事して絵を学び、木版画の制作を始める。中安や井上葎によって結成された地上社に入り、そこでの定期的な展覧会や日本水彩画会、兵庫県展などを発表の舞台とする。昭和 15 年より国画会、戦後より春陽会、日本版画協会に出品し、なかでも日本版画協会には会員として永年出品を続けた。

まるなげ み よきち
丸投三代吉 MARUNAGE Miyokichi 1911 (明治 44) ~1991 (平成 3)

飾磨郡広村ノ内広畑 (現・姫路市広畑区) に生まれる。幼いころ両親を失い、貧困の中独学で絵を学び、美人画や肖像画などを描いて生活の糧とした。昭和 18 年応召、シベリア抑留を経て同 22 年帰国。昭和 33 年再興第 43 回日本美術院展に初入選を果たす。以後同展を中心に活動を行い、昭和 37 年院友、同 54 年特待となる。郷土の風物や、そこに暮らす人々を自由闊達な筆致で描き、人間味あふれた力強い作風を展開する。昭和 49 年姫路市文化賞受賞。姫路市美術展審査員も務めた。

かわにしゆうざぶろう
川西祐三郎 Kawanishi Yuzaburo 1923 (大正 12) ~2014 (平成 26)

神戸市に生まれる。父は版画家・川西英。父を師として 8 歳の頃より木版画制作をはじめ、後に日本版画協会、国画会会員として活躍。昭和 41 年以降、奈良教育大学非常勤講師として教鞭を執る。同 60 年神戸市文化賞受賞。父の木版技法を継承しながら、墨版を巧みに取り入れるなど独自の表現を打ち出し、父とは対照的に静穏な世界を作り出した。

ふくもと たつお
福本達雄 FUKUMOTO Tatsuo 1926 (大正 15) ~

加古川市に生まれる。尋常高等小学校卒業後、海軍航空隊に入隊、昭和 20 年に除隊。同 27 年より西山英雄に師事し日本画を学ぶ。翌々年、関西総合美術展、京展、日展に相次いで初入選し、以降出品を続ける。昭和 30 年、西山翠嶂画塾青甲社に入塾し、同社解散まで青甲社展にも出品。昭和 37 年、同 43 年日展特選、平成 7 年京都府文化功労賞受賞。宝塚造形芸術大学教授、日展参与などを歴任している。

はまだしろうじ
濱田昇児 HAMADA Shoji 1927 (昭和 2) ~

京都市に生まれる。父は日本画家・濱田観。昭和 26 年京都市立美術専門学校研究科を修了、小野竹喬に師事。同年以降、日展を舞台に発表を続ける。一時期、独立美術研究所で須田国太郎にデッサンを学び、昭和 25-27 年にかけて油彩作品が独立美術協会展で入選するも、後に日本画一本に絞る。昭和 50 年日展会員、平成 2 年には評議員となる。風景を得意とし、厚みのある色彩と油彩にも通じるマチエールで、雄大な自然の美しさを描き出している。